

あをぞらの途中に烏瓜ふたつ

權未知子（『カムイ』）

烏瓜の真っ赤な実は、青やグリーンの中から突如あらわれる。あまりに見事な赤なのでそれを見つけたときは、まるで空から直接垂れてぽっかり浮いているようだ。

權未知子さんの第三句集『カムイ』（ふらんす堂）は読み応えのある句集だった。タイトルの『カムイ』は、あとがきによると「いささか大げさに響くのだろうか。しかし、北海道余市の実家から車でそれほどかからない場所にある神威岬（かむいみさき）の」名からとられたそうだ。

一瞬にしてみな遺品雲の峰
南風吹くカレーライスに海と陸
簡単な体・簡単服の中

など、すてに人口に膾炙した句が納められているが、次のような句群も好きだった。

賀状書くところに棲める海の紺

北海道の海辺の町に住む誰かれに賀状を書いているのだろう。思い浮かべるのはその海の色である。

石炭と雪が出合へば素敵だらう

ここにも「余市」という見知らぬ町の匂いがする。

姉に家われにななかまどを遺し

お母様を亡くされた。權さんは三姉妹のまんなかという。姉には家、次女にはななかまど、では三女は何を遺されたのだろう、と思わなくてもいいことを思ってしまう。家という立派な形あるものと、ななかまどの実という対比が面白い。

全体に母娘の情と望郷の念がじんわりと伝わってくる句集である。そんななかで、猫好きの權さんらしい、次の一句にも惹かれた。

はつふゆの猫にうつすら静電気